モダリティー（非）依存の二次言語習得

デボラ・チェン-ピクラ（アメリカ合衆国・ギャローデット大学）
ジェフリー・パーマー（アメリカ合衆国・ギャローデット大学）
ヘレン・クリドブロヴァ（アメリカ合衆国・セントラルコネチカット州立大学）

ほとんどのろう者による第二言語習得に関する報告には、書記された周囲の音声言語の習得が含まれている。これらの研究の首尾一貫した見解は、習得の遅かったろう者である手話言語話者は、第二言語の発達が比較的うまくいかないということである（Mayberry 2007）。しかし、この研究の大部分は、ある重要な問題を見落としている。つまり、第二言語を読んだり書いたりすることを学ぶことは、言語そのものを習得することだけでなく、その言語をコード化するために使用される二次的な（つまり書記の）形式を学ぶということも含んでいるということである。第二言語としての英語の試験に関する北アメリカのろう者の学生の直面する、よく記録された困難は、たとえば、第二言語習得の基本的な能力とは異なる英語の音韻論的なコード化や自覚を反映している。我々は、第二言語としての手話言語習得におけるろう者である習得者の能力をテストすることで、第二言語習得に第一言語が遅れて接触することの影響を、より直接的で正確に計測する手段を与えることができることを提示する。この発表では、我々は第一言語と同じモダリティーで第二言語を学んだろう者である M1L2（第一モダリティー第二言語）習得者に関する見解を文献により概観し、第二言語としての英語研究からの典型的な記述よりもよりうまくいった記述が現れてくると主張する。音声言語についての何十年にもわたる研究から、転移を起こした第二言語習得者は、習得において、強力な促進効果を持ちうることが知られている。たとえば、第一言語と第二言語の間の同系語は、とりわけ初学者に対して、語彙の発達を促進する（Hall 2002）。これらの語彙における促進効果は、第二言語習得の他の側面における認知的な資源を「解放」し、結果として統語論などの他の分野において、第一言語が第二言語との同系語をよりわずかしか共有していない学生と比較した時の利点となるかもしれない（Ard & Homburg 1983）。同様に、第一言語と第二言語がよく似た形態論的過程を持っている学生は、形態論的な転移を容易にする（Jarvis and Odlin 2000）。ろう者である習得者の手話である第一言語と、書記された第二言語の間での転移も、とりわけ統語レベルでは可能であるけれども、二つの自然手話言語の間の転移は、すべての言語学的レベルにおいて、論証可能なほど十分に大きい。これは驚くほどの手話言語間の類型論的な類似性のためである（Sandler 2006）。孤立した手話記号を再生産するときには M1L2 の手話話者は、報告によれば、手の形に小さな音韻的な間違い（Chen Pichler 2010）や近位化（Mirus et al. 2001）を生じるが、しかし全体としてよく統合され自然な外見を持つ手話記号をうまく生産する。同様に、M1L2 手話話者の、かれらの第一言語に存在する連結合成的でない形態論や、類別詞の形式、言語的機能を示すための空間の利用への親和性は、手話言語である第二言語への転移の高い潜在的可能性を与える。M1L2 についての研究は、遅れて接触を受けたろう者

の第二言語習得をより正確に測定することを許すだけではなく、聴者である習得者によって行われる音声言語の第二言語習得にのみ基づいて確立されてきた第二言語習得の「典型的な」パターンの重要なテスト環境ともなる。端的に言うと、M1L2 習得者の発達に関する研究は、異なるモダリティーによって新しい言語を習得することによって混同されるかもしれない発達のパターンを解きほぐす機会を与える。ろう者である M1L2 手話話者を慎重に精査することは、第二言語習得における視覚－身振りのモダリティーの貢献を、アイコン性や身振りの経験の役割を含む生物学的・社会－文化的な影響の観点から理解する鍵となる。この発表は、この重要な新しい分野をガイドする助けになるような予測を与える。